

情報の十字路

—海外旅行印象記—

福井 徹
Toru Fukui

第1節 まえがき

情報の発生源は人と人との出会いにある。人と人との出会いの増加は情報を指数関数的に増大させる。この情報の発生源の主なケースとしては

- ①地理的交流の場、東西南北の要衝の地であること。(いわば交通・交易の要衝・交差点)
- ②宗教・文化・経済等のシンボリックな地域であること(たとえば宗教上の聖地や文化・経済面の首都など)
- ③戦争等の争点の対立の場(歴史的に争いの絶えない地域)

等の条件が複数個備わった場合には、多くの人々の出会いから生じる新たな情報が発生する。すなわち空間的・地理学的な点での十字路(東西南北の交差する地域で、陸上・海上いずれも含む)と②、③等が時間的・歴史的に交差している地域、言い換えれば前者が静的十字路、後者が動的十字路といえる。

したがってそのような地域を「情報の十字路」と名づけた。(詳細は190頁「情報の十字路全体図」に示す。)

情報の十字路には必然的に光と影が生まれる。すなわち繁栄と混迷である。安定と不安定である。

この小論文では今回の新たな旅を通じて、自分なりに得られた考察結果を旅の楽しみの副産物としてまとめたものである。

毎年春休み・夏休みを利用して約2～3週間にわたる海外旅行を楽しみにしている。これまでに約40～50回海外旅行をしてきたが、振り返って共通して言えることは旅の目的は「三美神である。」すなわち美観・美食・美術である。よく聞かれる質問は「それだけたくさん旅行されてどれが一番良かったですか？」それに対しては「どこにもそれぞれ魅力があり、それぞれの思い出があります」と答えている。

「旅する哲学(アラン・ド・ボトン集英社)」の中で次のような一節がある。

美と出会った時、何よりも強く感じる衝動は、美をそのままとどめておきたい、美を所有したい、人生の中に美の重さを保ちたいという欲望ではないだろうか。こう言いたい思いがつのる。—— わたしはここにいた、私にとっては大切なことなんだ、と。

しかし美は捕え難い。しばしば二度と再び帰ってくることはないであろう場所で見つかったり、季節と光と天候のまれにしか起きない結びつきの結果だったりするからだ。カメラは一つの選択肢を提供する。写真を撮ることは、その場の美に触発された所有したいという欲望をやわらげてくれる。貴重な場面を失うのではという心配も、シャッターを押す音とともに落ち着いていく。でなければその場の美を自分の体に刻みこもうと試みることもできる。自分をその場にさらに溶け込ませることで、自分の中にいつまでも生かしておきたいと願いながら。そこで筆者は美と美を所有することの関心から五つの原則に到達する。

- 1 美は、さまざまな要素が複合して、精神に心理的な、また視覚的な影響を与えた結果である。
- 2 人間は、美に反応し、美を所有したいと願う傾向を、生まれながらにして持っている。
- 3 この美を所有したいという欲望には、多くの現れ方がある。—— 土産物を買ったり絨毯を買ったりすることから、柱に自分の名前を彫りこんだりすることまで、さらには写真を撮ることまで含めて。
- 4 美を適切に所有する方法はただ一つ、美を理解することによってしかない。美を支える要素を（心理的にも視覚的にも）明確に自覚する事によってしかない。
- 5 美の意識化と美の理解とを追求する最も効果的な方法は、美しい場所を芸術によって（書くこと、あるいは描くことによって）描写しようと試みることだ。それは書く才能、描く才能があるなしにかかわらない。

以上引用がやや長くなったが、私の旅行目的である、三美神 —— 美観・美食・美術

いずれもが上の五つの原則に該当する事を改めて認識した次第である。

今春（2012年）はイスタンブールとシチリアを中心にした旅である。

毎回自分なりのテーマを考えて1年ほど前から計画している。今回の旅行先はほぼ3000年（紀元前10世紀～AC2000年）に亘って歴史の表舞台で、ある時は主役にある時は脇役となって、登場してきた地域である。したがって、いわゆる3000年に及ぶ歴史遺産めぐりといっても過言ではない。

これまで幾度となく歴史遺産を見学する機会が多くあったが、それらは旅行の中でたまたまその一部が含まれていた程度であり、今回のように全行程が世界遺産であったのは初めてである。今回選んだ理由を自分なりに振り返ってみると、「情報の十字路口」の代表的地域として

- 1) ヨーロッパ文明の中核である地中海で栄枯盛衰の歴史に刻まれた地域 —— シチリア
- 2) BRIC sを中心とした新興国の目覚ましい発展の延長線に次の成長を期待されている国 —— （トルコ、イスタンブール）を選んだ結果となった次第である。

〈ベネチアについて〉



そもそも都市もしくは国家の繁栄の歴史をたどると、そこにはいろいろな条件があるが、よく例としてあげられるベネチアは、まさに「情報の十字路口」に代表される地域である。

先にあげた情報の十字路口の前提3条件については

- ① 地理的交流の場、東西南北の要衝の地であること。（いわば交通・交易の要衝・交差点）

この地図からも明らかなように東西南北の要衝として中世の長きにわたって、交易の要衝となった。

地中海交易を中心とした商業都市として繁栄したわけであるが、その裏には近隣諸国との緊密な安全保障体制・常に周辺諸国よりも一歩先を見た情報の活用（軍事的・気候変動的・遠方の商品知識・金融システム・交易ルート等々）さらに何よりも大切なことはベネチアそのものが政治的にも安定し平和な地域を維持できたことである。かつて3～4回訪問したことがあるが、現在は過去の繁栄の遺産として世界でも有数の観光地になっているがそれらの大半は13～15世紀に建造された建物である。もともとベネチアは東ローマ帝国内における免税特権を活用して、東西貿易の仲介者として莫大な富を築いた。アジア全域から集められた香辛料や宝石・貴金属、絹織物などの商品はヨーロッパ各地に届けられた。

- ② 宗教・文化・経済等のシンボリックな地域であること（たとえば宗教上の聖地や文化・経済面の首都など）

また、ヨーロッパ各地から商人が集まってくる。彼らの治安・安全保障をするための警備システム・異国人同士のコミュニケーションを図るための通訳の強化、銀行の為替業務の誕生や各国の大使館もおかれた。このように交易を大幅に拡張して円滑な運営ができるシステムのひな型がこの時代にはじめて完成したのである。さらにベネチアはその勢力圏を地中海、アドリア海からイオニア海へと拡大し、強力な艦隊を補強しヨーロッパ最大の海軍王国として発展したのである。その結果15世紀末にはパリに次いでヨーロッパで第2位の大都市となった。

このようにみるとベネチアは順調に発展し、周辺国と友好的な関係が続いたように思えるが、実際には商船の護衛に携わる艦船と、近隣の利害の反する近隣諸国の争いは絶え間なく、また海賊船の出没も大きな問題であった。

③戦争等の争点の対立の場（歴史的に争いの絶えない地域）

ベネチア自体は必ずしも争乱の場にはならなかったが、ベネチアの繁栄を支えるための周辺地域との対応については前述のように長きにわたって絶え間ない争いが続いた。

その後東ローマ帝国の滅亡と新たに覇権国となったオスマン帝国との戦いに敗れ、徐々に勢力を失っていき、ついには18世紀初頭ナポレオンの進出によりナポレオンの配下に下ることとなったのである。（塩野七生著：海の港の物語－ヴェネツィア共和国の一千一年－中央公論社）

今回の旅行先であるプロヴァン、シチリア、イスタンブールは、ベネチアの商圈と深く関係しており、それらの観光地に足を踏み入れつつ、中世時代の商人や彼らを護衛した軍人たち、商業の円滑なシステムを維持するための金融・交通・通関・安全・保安等々の名残を踏みしめる機会を得ることができ、新たな感慨を催す次第である。

またベネチアの歴史を振り返って感じたことだが、訪問先の3か所は「情報の十字路口」のもっとも典型的な例に挙げられるのではないか。さらには、この小論文から

- ・日本は「情報の十字路口」から歴史的に見てどのような位置付けになるのだろうか、
- ・グローバル化が急進展する21世紀の情報社会、インターネット社会では「情報の十字路口」の前提条件はどのように変わっていくのだろうか

等の課題を考えるきっかけになれば幸甚である。

第2節 主な旅行先と論文構成について

1) プロヴァン（4月4日）

パリ東駅から約40分で世界遺産のプロヴァンへ

1日観光で十分な内容であったが、当時はヨーロッパでもっとも商業の発達した「情報の十字路口」とはとても想像のつかない、中世の面影を残すのみの地方都市である。

2) イスタンブール（4月7日～13日）

ヨーロッパとアジアの接合点だけあって多くの人種が寄り集まっている。雑然とした中にも、活気とこれからの発展を予言させる雰囲気がある。またイスラム・キリスト・ユダヤの3大宗教が街の至る所に見渡せるのも歴史の重みとして、実感できる

まさに「情報の十字路口」にふさわしい。

3) シチリア（4月14日～19日）

シチリアはおよそ四国と岡山県の合計の面積である。ややスケジュールとしては欲張ったと反省しているが、地中海の「情報の十字路口」にあったがために、ギリシャ時代、ローマ時代・東ローマ時代の属国期間、ノルマン人によるシチリア王国時代、オスマントルコによる征服期間、それぞれに生まれた独特の文化とそれにまつわる遺跡群

プロヴァン・イスタンブール・シチリアの旅

日程	移動計画
4月3日(火)	伊丹—成田—ミュンヘン
4月4日(水)	プロヴァン
4月5日(木)	パリ
4月6日(金)	パリ
4月7日(土)	パリ—イスタンブール
4月8日(日)	イスタンブール
4月9日(月)	イスタンブール
4月10日(火)	イスタンブール
4月11日(水)	イスタンブール
4月12日(木)	イスタンブール
4月13日(金)	イスタンブール
4月14日(土)	パレルモ(シチリア)
4月15日(日)	パレルモ～アグリジェント
4月16日(月)	
4月17日(火)	シラクーサ(シチリア)
4月18日(水)	シラクーサ～カタニーヤ
4月19日(木)	カタニーヤ(シチリア)
4月20日(金)	成田—伊丹



を、まるで博物館を見学するように堪能できた。

4) 本論文の構成について、

- ①訪問先ごとに歴史的な発展と衰退の流れを展望し、実際に訪問した時の印象や記憶にとどめて置きたいエピソードや写真等を添付した。
- ②特にイスタンブールでは、歴史的な流れとして、
 - ・アナトリア地方にヒッタイト文明が開化 (BC1500年～1400年)
 - ・東ローマ帝国 (AC330～1453)
 - ・オスマン帝国 (AC14～20)
 - ・トルコ共和国 (1923～現在)
- ③シチリアでは

- ・原住民が北方イタリアからの侵入に会う (BC1500 ~)
- ・ギリシャ人とカルタゴ人の侵入に会う (BC800~600)
- ・ポエニ戦争 (BC264 ~ 241)
- ・ローマ帝国による支配 (BC300 ~ AC900)
- ・オスマン帝国による支配 (AC900 ~ 1100)
- ・ノルマン・シチリア帝国による支配 (AC1100~1400)
- ・スペイン帝国による支配 (AC1400~AC1800)
- ・イタリア国シチリア州へ (AC1800~ 現在)

④訪問先ごとに「情報の十字路口」が果たした役割と果たせなくなった結果を要約した。

⑤日本を含めた「情報の十字路口関連図その1」の全体マップを別項目として図示し、合わせて、今後のインターネット時代における「情報の十字路口関連図その2」の在り方の私見を述べた。



第3節 中世都市プロヴァン

中世市場都市プロヴァンと各都市との位置関係を示したのが、左図である。

現在はその面影はほとんどなく、わずかに観光インフォメーションセンターや当時の中世都市の名残を再現させた城壁が観光客のために残されている。(左図参照) パリから東に向かって列車で約1.5時間中世の佇まいの残る石畳の人影もまばらなところである。

12~13世紀には東西南北の交易の十字路口として繁栄した。

東方はドイツ地方からワインなど、西側には大都市の消費地パリ、南はイタリア国のベネチア、フィレンツェから香辛料や貴金属、絹織物など、北はバルト海諸国の各都市から毛織物などがたがいに通商の機会を求めてやって来た。その交流点がプロヴァンであった。したがってこの交流点では定期的に市が開かれるためには次のような要件を満たす必要があった。

- ・比較的長期滞在可能な宿泊施設の充実
- ・市が安全に開催されるように、警備体制の完備
- ・物資の安全保管に必要な倉庫や保全
- ・各国の商人同士のコミュニケーションを円滑に図るための通訳の専門家の確保



プロヴァンの石畳と城壁の一部

・商品の売買に欠かせない通貨の両替などの金融機関の信用体制等々の交易システムが整備されなければならなかった。

このような商業発展のインフラが実現し平和と安全な時代背景があっはじめて広域商業圏が実現できたのである。また、定期市を開くために必要な広報宣伝などの情報伝達方法も大切な要素になったことは言うまでもない

以上から明らかなように、プロヴァンが13～14世紀には「情報の十字路」として地政学的に東西南北の通商の要衝として、インフラの充実整備がなされた。同時に、プロヴァン自らが東西南北の通商領域に対する情報の発信源としての機能を発揮し続けてきた結果、商業都市として繁栄したといえる。

第4節 イスタンプールの歴史と情報の十字路について

① アナトリア地方にヒッタイト文明が開花

BC1500～1400年その後小王国に分裂



紀元前1500～1400年前には、アナトリア地方にヒッタイト文明が栄え、国力の源となったのは鉄器であり、その製鉄技術は国外不出とされていた。当時エジプトと戦うほどの強国であったが、外部からの侵入により小国に分裂した。その後紀元前6世紀にはペルシャ帝国の支配下にはいり、紀元前334年にはマケドニアのアレキサンダー大王に侵略され、ギリシャ世界とオリエント文化によりヘレニズム文化が生まれた。アレキサンダー大王の石棺(下左図)と言われている宝物がイスタンプールにあるトルコ考古学博物館に展示されており、そこに立ち止まると思わず大王の偉業を偲ばせてくれる。その後紀元前30年ごろまではローマ帝国の支配下に入り、当時の帝国の一都市としてビザンティウム(後のコンスタンチノーブル、現在のイスタンプール)が戦略的に重要な都市となった。戦略的都市の意味は、現在のイスタンプールがそうであるように、南にマルマラ海、黒海とマルマラ海をつなぐボスポラス海峡、それら二つの海流を和らげる吸収港としての金角湾(下右図)、からなる物流交易の要所であると同時に、敵国が侵入する際の絶好の要塞でもあった。現に従来からもそうであったが、20世紀にいたるまでこの都市を中心にした戦略上の要衝であった。



アレキサンダー大王の石棺(考古学博物館)



金角湾(橋の向こう側が旧市街、手前は新市街)

② AC330年～1453年 東ローマ帝国

のちにビザンチン帝国へ（首都はローマからコンスタンチノーブルへ）



ローマ帝国の支配下になる

AC200年当時のローマ帝国の一地方都市に過ぎなかったにもかかわらず、この都市を支配していたこの都市の一皇帝セピティミウス＝セウエルス（現在でいえば一地方知事）はこの都市の再建と美的センスを持って、ローマ帝国に匹敵するような数々の建築物を造り、またより多くの住民がより安全に生活できるように、外敵からの防御壁を内陸側にも造成した。また娯楽施設の建設にも力を注ぎ、カラカラ浴場並みの施設や競技場を造った。

現在は絶好の観光遺跡として往時を偲ばせてくれる。

その後ローマ帝国はいわゆる軍人皇帝時代の混乱期に入った。彼らの皇帝としての平均寿命は2年6カ月で内乱状態がAC300年まで続いた。

AC315年コンスタンティヌス1世が、乱立するローマ帝国の地方皇帝を平定し、ローマ帝国はコンスタンティヌス皇帝ただ一人の支配下となった。その後帝国の首都をビザンチオン（今のイスタンブール）に置き、首都名をコンスタンチノーブルと改名した。395年にローマ帝国が東西に分裂した際に、コンスタンチノーブルは東ローマ帝国（ビザンチン帝国）の首都となる。

今回の訪問で感ずることは、AC315年といえば、耶馬台国時代に相当し、日本の考古学的見地から見れば、わずかな手がかりを頼りに判断せざるをえない状況に対し、遺跡や歴史的事実が記録保管されており、改めて歴史的事実の重さ・貴重さを思い知らされる。

ところでローマ帝国は東ローマ帝国になってからも1200年以上繁栄を続けたが、その背景にはやはり「情報の十字路」としての役割は極めて高かった。1200年の間には中世から近世にかけての大転換の時代でもあり、イタリアルネッサンスによって新たな価値観の転換を余儀なくされていた時代である。その中において、コンスタンチノーブルは西のベネチア、ジェノバ、フィレンツェ、東のイスラム世界、北の神聖ローマ帝国、南の地中海文化の交流点として、また新たな情報の発信源としての役割を果たしてきた。

③ AC1453 ~ AC20 世紀初頭

オスマン帝国



アヤソフィア外観写真



漆喰の中から出てきた聖像

アヤソフィア聖堂の外観を印象付けるものは、中央大円蓋の巨大な重量感である。

しかし聖堂の四隅にそびえる四本の尖塔も、それらが本来この聖堂にあったものではないにもかかわらず、今日ではこの建物に風格を与えている。勿論これらの塔は聖堂がモスクに変えられてから、これらはいずれも 13 ~ 16 世紀にかけてオスマントルコのスルタンたちによって付け加えられたものである。外観は全く基督教会の大聖堂を想像させるのは困難である。聖堂の圧巻は何と言っても中央の大円蓋である。それは地上 54 メートルの高さにそびえている。聖堂の内部は「大理石とモザイクの壁画とで覆いつくされていた。しかしモザイクの壁画はオスマントルコの時代に壊されたり、覆いつくされていた。1932 年にアメリカの学者たちが、モザイク壁画を覆っていた漆喰をはがす作業をしていたところ、右の写真にあるようなキリストのモザイクが表れてきたのである。現状は当時の状態とはほど遠い位が、それでも各部分に残る金地に輝く装飾文様はビザンチン時代の人々がここに超自然的の世界を実現しようとしたことを感じさせてくれる。この一帯にはブルーモスク（イスラム教のモスク）やスルタンの宮殿（トプカプ宮殿）考古学博物館などまさに東ローマ帝国、オスマントルコ帝国の至宝場である。（コンスタンチノーブルを歩く「尚樹啓太郎著」東海大学出版会より）



④ トルコ共和国の成立

イスタンブールは東ローマ帝国時代はコンスタンチノーブルと呼ばれ 13 世紀にはオスマントルコに占領され、第 1 次世界大戦で崩壊。新たにトルコ共和国設立イスタンブールとなった。



グランドバザールの光景

18世紀に入るとオスマントルコはロシアとの戦争を契機に衰退を始める。やがて第1次世界大戦でドイツ側についたオスマントルコは連合国に大半の領土を没収させられた。その後オスマントルコが崩壊し新たにトルコ国家が樹立する。その後イスラム国家でありながらヨーロッパ式近代国家を目指し

①政教分離②教育の統一③衣服の西洋化④西暦制⑤言語をアラビア文字からアルファベットへ⑥一夫一婦制の導入⑦女性選挙権などの大改革を行った。

これらの偉業を達成したのはムスタファ・ケマルでイスタンブールの街中至る所に彼の銅像が建っていた。

今回はイスタンブールに7日間滞在したが、イスタンブールの人々の活気ある姿、さらには観光客を引きつける、素晴らしいロケーション（ボスポラス海峡を中心とした海洋風景、モスクの立ち並ぶ宗教的落ち着き、豊かな歴史遺産、世界三大美食の一つといわれるトルコ料理、まさに三美神そのものである。

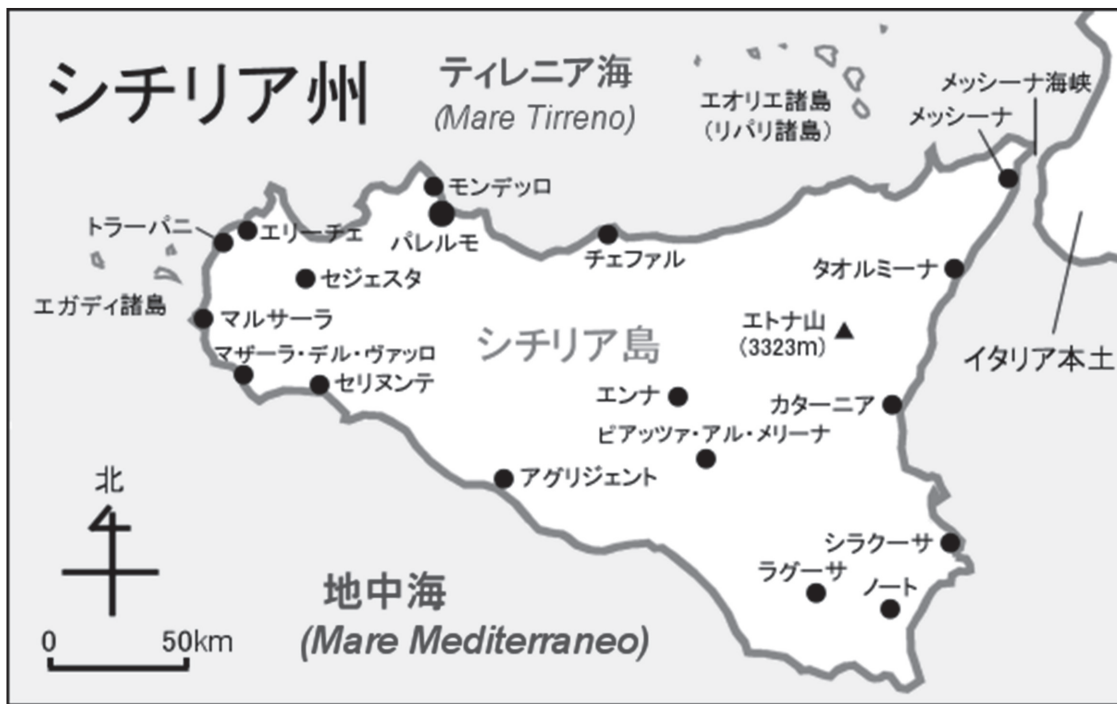
⑤イスタンブール情報の十字路口

イスタンブールは文字通り古代から東西南北あらゆる面から交易の要衝である。

北からは黒海を通じて毛皮類、東側からは絹織物、南側からは香辛料・貴金属・果物などが集まる。宗教面ではイスラム・キリスト・ユダヤ等が入っており、時には争いと融合の繰り返しがあった。「情報の十字路口」の最も象徴的な姿がグラインドバザール（巨大な市）である。旧市街の中心部にあり、甲子園球場が数か所ははいるほどの巨大なマーケットである。そこには絹織物・衣料品・絨毯・香辛料・貴金属・果物・キャビアなどの高級食料品・陶器類・ハチミツやお菓子類あらゆるものが所狭しと立ち並んでいる。日本人客とみれば、ひとつつつこい顔つきで話しかけてくる。この土地独特の文化であり、人と人を結びつける原点になっているのだろう。今回の旅行では現地人のギュル・ジャンさんに案内していただいた。彼女のご両親の出身はギリシャとトルコとのことである。イスタンブールには多くの民族の血が流れており、まさに民族のつぼみである。これらが融合し、人々の交流を通じ「情報の十字路口」が成り立っているのである。金角湾をつなぐ橋梁やボスポラス海峡を地下鉄で接続させる大工事が日本企業を中心に建設中である。

イスタンブールは経済的にも活況を呈しており、そのうちにオリンピックの誘致もありうる気配である。

第5節 シチリアの歴史と情報の十字路口について



長靴を思わせるイタリア半島の「つま先」に、いまにも触れそうな感じでシチリアがある。イタリア本土とこのシチリアを隔てる海峡はシチリア最東端の都市メッシーナの名をとって古代からメッシーナ海峡と呼ばれてきた。最短

距離ならばわずか3キロ。本土側の連絡船の発着地ヴィツラ・サンジョヴァンニからメッシーナ港迄も7キロしか離れていない。この間を結ぶ連絡船に乗ればコーヒーを注文してそれをゆっくりと飲みおわる頃には着いている。

ヴィツラ・サンジョヴァンニに立つと出て行った連絡船が対岸のメッシーナにつき人と車と列車を乗せて再び戻ってくる様子が手に取るように眺められる。現代になって、この海峡に橋を架ける計画は何度となく試みられたが、瀬戸内海と違ってメッシーナ海峡には橋杭を立てることのできる小島がない。架けるならば吊り橋しかないのだが、世界で最も長い吊り橋になるという。1998年完成予定の明石海峡大橋でも中央支間距離は2キロメートルであるという。

技術的には3キロも可能という話だから、もしかしたらメッシーナ海峡にかかる橋はいつかは日本の技術で実現するかもしれない。とはいえ今のところは船で渡るしかないのである。

船で渡るしかないとすれば、メッシーナ海峡の状態は2200年昔も現代も大した変りはないことになる。イタリアの本土側に立って、シチリアを眺めた時に抱く思いも同じようなものではなかったか。

そして、たとえ海が間にあろうと、この距離がこの思いがローマと覇権を競うカルタゴとの対決の端緒になったのであった。(ハンニバル戦記 ローマ人の物語Ⅱ 塩野七生より抜粋)

シチリアは地中海で一番大きな島であり、面積は四国と岡山県を合わせた広さである。今回の旅行ではシチリア島の東北(パレルモ、以下四国でいえば松山市あたり)→南部(アグリジェント、高知市)→西北(タオルミーナ、高松市)→西南部(シラクーサ、徳島市)をバスで移動した。シチリアの交通手段は鉄道かバスであり、バスのほうが便利で早いのでバスにしたわけである。路線バスは生活道路と観光客向けの高速道路から成り立っているが、高速道路は特に最近シチリア島内に整備されており、移動は快適である。ただしバスの運行スケジュールはかなりルーズなところがあり、また発着停留所も指定場所がはっきりしないため戸惑うこともあった。

それぞれの地域ではいずれも歴史的に紀元前5~6世紀からギリシャ・ローマ遺跡や中世期以降のカソリック、アラブ文化、の象徴的な建築などでまるで町中が歴史博物館のような印象であった。

この機会にシチリアの歴史を簡単に振り返ってみると

BC6000年ごろシチリア島最古の原住民(シニカ人)が住んでいた。

① BC1500年 イタリア半島からシクリ人が移住し原住民を追い払い、西部から南部に進出

② BC800~600年ギリシャ人(東部)とカルタゴ人(フェニキア人の末裔、主として西部)

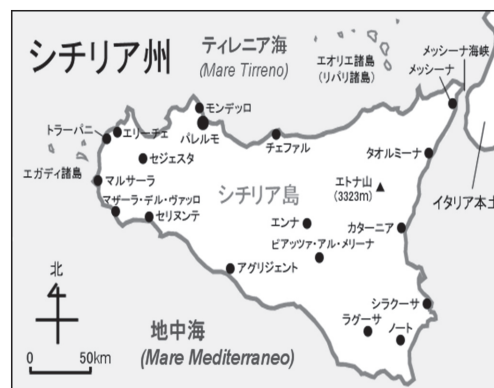
BC1500年 原住民はイタリアからの移住民により東部に追い払われる。

イタリアからの進出

カルタゴは今のチュニジアあたりを拠点にして古代都市国家を形成、地中海の覇権国家として君臨、一方ギリシャ人はギリシャ都市国家の植民地としてシチリアに多く移住していた。そこでギリシャ人とカルタゴ人による植民地戦争が勃発、約数100年シチリアの広範な地域で戦争状態が続いた。

アグリジェントにはギリシャ神殿跡がいくつも残っており、破壊と創造が繰り返された。

また南東部のシラクーサにはギリシャ劇場跡も散在しており、往時をしのぶこともできた。





アグリジェントのギリシャ神殿



シラクーサのギリシャ劇場跡

BC 800～600年 ギリシャ、カルタゴによる植民地戦争



ギリシャ人の植民地進出



BC 800～BC 600年カルタゴ人の進出



③ BC 300年ポエニ戦争 (BC264年～BC241年)

ローマ帝国がカルタゴを破りシチリアを占領、有名なハンニバルの戦いやポエニ戦争の詳細については冒頭の塩野七生著ハンニバル戦記ローマ人の戦いⅡに詳しい)

以後約1000年にわたりローマ帝国及び東ローマ帝国(ビザンチン帝国)の植民地となる。

〈シチリア東部タオルミーナ・カターニャ・シラクーサ・ノウト〉

シチリアの移動は主にバスである。アグリジェントから約4～6時間を経てタオルミーナに到着。ここのホテルは5つ星で有名なサン・ドメニコホテルである。修道院跡をリニューアルした近代のホテルに代わっている。高台から見下ろす景観は観光地を自慢するだけあって素晴らしい。シーフードも日本人に人気があって、多くの観光客が来るそうだ。3日ほど地元のガイドさんをお願いして車でシチリア東部の観光地歴史遺産を紹介してもらう。ガイドさんは日本人の女性の方で学生時代から単身イタリアへ来られて、5年ほどになるそうだ。たくましく独立心旺盛な方で、今後の活躍を期待する。この辺りはシチリア最高峰のエスピオ火山が眺望できる。18世紀に大噴火の結果カターニャの街は噴火灰で町中が埋没したそうだが、普及に努め現在はこの地帯の中心地として繁栄するまでになった。ところどころに壁面が黒ずんでいるのを見かけるが、その当時の壁面を再利用しているとのことである。

④ローマ帝国、東ローマ帝国
カルタゴによる支配が
約1000年間続く



ローマ帝国の進出



カタニーニヤの黒ずんだ壁石

東ローマ帝国の進出
(AC1300年)

BC300~AC900年カルタゴの支配

⑤オスマン帝国による AC900~AC1100年にわたる支配

オスマン帝国により当時世界的に最高レベルの農業技術、手工業技術さらには文化・芸術・学問が導入され、シチリアはかつてない繁栄がもたらされた。その結果シチリアを拠点として東はスペイン、北方はイタリアを通じ交易と学術文化の伝達ルートとなった。



下図に示すようにオスマントルコは当時東ローマ帝国をはじめ北アフリカ等の膨大な地域を占領しており、その後スペインを拠点にヨーロッパにもかなりの影響を与えた。

その後、レコンキスタにより撤退を余儀なくされた。

アラブ人によるシチリア征服と政治的安定は長くは続か

ず、オスマントルコに代わってノルマン人の支配によるノルマンシチリア王国が1130年に成立。

パレルモの街はイスラム・キリスト・ユダヤ等の文化が入り組んでおり、左

イスラム・ユ
ダヤ混合教
会



オスマントルコ帝国の進出



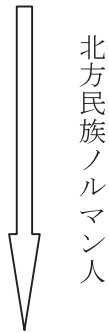
シチリアと
オスマン帝国の関
係図

図はその典型例である。うまく融合した例であるが、逆にそれぞれが独走して、全体最適の姿は見えにくい。その結果道路や住環境の整備が遅れ、時間とともにスラム化する恐れが高い。

⑥ノルマン人によるノルマンシチリア王国（AC 1 100~AC1 400年の支配）

ノルマン人は9世紀のノルマンディ地方に定着したバイキングの子孫たちであり、12世紀初頭のシチリアは大小いくつもの国に分立しており、弱肉強食の戦国時代であった。ノルマン人たちはこれらの国の傭兵として雇用されていたが、やがて彼らは同じノルマンの仲間として独自の強力な集団になり、自分たちで領土を獲得するにいたった。ノルマンシチリア王国がこのような背景で成立した。その中心地としてパレルモに大聖堂（下記写真）やアラブ風モスクやユダヤ教シナゴークなど町中至る所に遺跡として残されている。

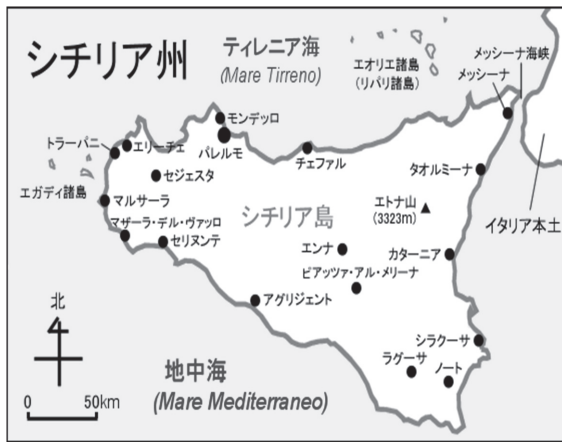
ノルマン人による
ノルマンシチリア王国
AC 1 100~AC1 400 年の支配



ノルマン人たちはこれらの国の傭兵として雇用されていたが、やがて彼らは同じノルマンの仲間として独自の強力な集団になり、自分たちで領土を獲得するにいたった。ノルマンシチリア王国がこのような背景で成立した。その中心地としてパレルモに大聖堂（下記写真）やアラブ風モスクやユダヤ教シナゴークなど町中至る所に遺跡として残されている。

<パレルモの印象記を記す。>

午前中は王宮（ノルマンシチリア王国）と礼拝堂に行く。ホテルから約10分少々のところだが、観光客のお目当てとあって、多くの人たちが並んでいた。礼拝堂はキリストと12人の使徒たちが飾られており、なかでもキリストを中心に、ペテロとパウロの肖像画が左右の金色の壁面に極彩色で飾られている。



パレルモの礼拝堂の一部



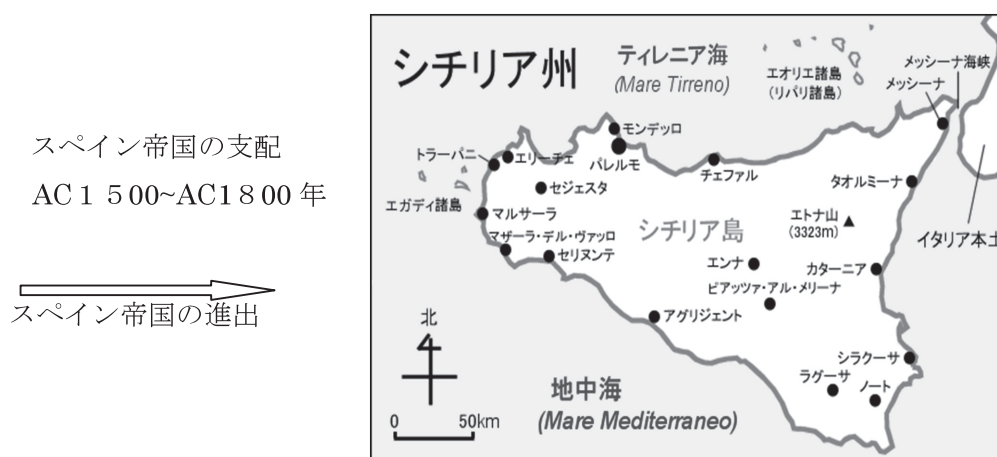
パレルモ大聖堂

モザイク模様とイスラム様式の幾何学模様が調和され、まるで平泉の金色堂とイスラム様式とキリスト教会の複合美術を見るようであった。

いかに当時のノルマンシチリア王国が豊かな文化を享受していたかをうかがい知ることができる一幕であった。

⑦スペイン帝国の支配 (AC1800~AC1800年)

16世紀には新大陸の発見と相まって、スペインが覇権国となり地中海支配を握ることとなった。しかしながら、交易の中心が新大陸を通じて貴金属や食料品、香辛料等が豊富に入手できることになり、シチリアは農業・手工業・さらには文化・芸術・学問などの発信基地から徐々に衰退の一途をたどり後進国に転落していった。したがって、現在の主な文化遺産はBC 5世紀ごろから AC16世紀ごろまでの間にシチリアにて支配者になった外部侵略国が残していった遺産といえる。



⑧イタリア統一によりイタリア国シチリア州へ AC1800~ 現在

その後19世紀にシチリアはイタリア統一のもとにシチリア州としてイタリアにある20の州のひとつである。人口は500万人でイタリアでは第4~5番である。ただし生活レベル・民度の点ではイタリアでは低いほうである。また付加価値を生む主な生産物も見当たらないし、観光が主な資源である。今回の旅行の印象としては芭蕉の句ではないが「夏草や 兵物どもの 夢のあと」が至るところに見受けられた。

⑨シチリア情報の十字路 まとめ

シチリアは地政学的にみても、すでに紹介したように地中海ルートにとって東西南北の要衝である。このような特異な地域であるために、歴史的な大転換期ごとに常にあらゆる地域から人的大移動が行われた。その結果ある時は戦争状態に、ある時は植民地として新たな文化の基盤助成状態に、あるときは異なる地域同士の内戦状態に至った。

余談になるが日本という国を考えると、四面が海に囲まれていることはシチリアと同じ条件だが歴史的な時間ごとの推移をみると、第二次世界大戦を除くと、周辺地域との人的交流は、日本からの情報発信よりはむしろ諸外国からの情報受信・吸収に終始した。

シチリアは情報の十字路としての必要条件是満足していたが、新たに侵入してきた外敵により、シチリア独自の文化・社会ができる余地がなかったといえる。したがって、自ら外部に向かって情報発信ができなかったというのがBC 6~7世紀から約2000年以上にわたる状況である。

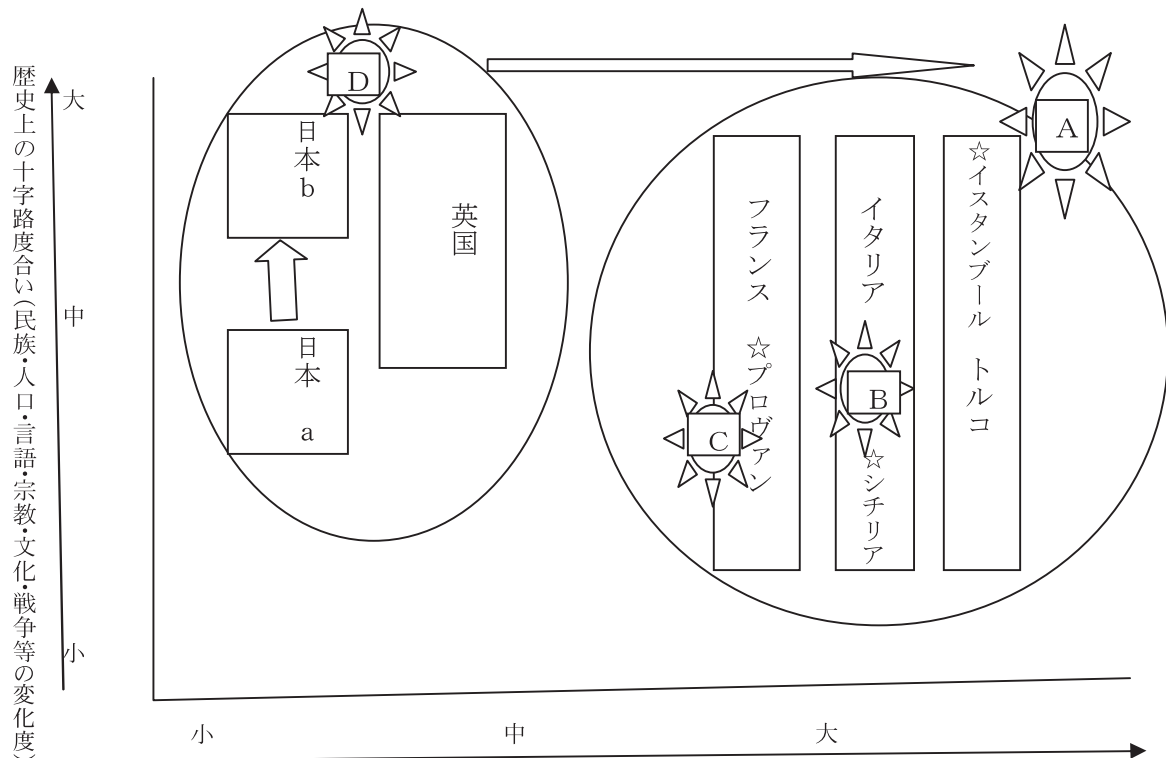
第6節 まとめ

①世界歴史遺産の旅と情報の十字路口の関連図

今回は約3週間「世界歴史遺産の旅」をテーマにして見聞を広めてきた。その結果を何らかの形で印象記としてまとめる機会を得たので、過去を振り返り、未来に対する一つの展望を考察した。

もともと本学情報学部では文理融合の理念が発足の原点でもあり、情報社会にあって人々が豊かで繁栄できる基盤作りに少しでも貢献できる役割が私の原点にあった。

今回の旅を通じて、訪問先の歴史的背景の一端を肌で感じながら、当時の人々の栄枯盛衰の底流に流れているキーワードを「情報の十字路口」としてまとめた。



地理上の十字路口度合い（ある都市もしくは国が東西南北の周辺都市、国との結合・関係度合い）

「情報の十字路口」の全体図を上図に示す。

イスタンブール、シチリア、プロヴァンの位置付けを示した。また日本と英国は参考までに相対的な位置付けを示した。日本がaからbへ移行したのは鎖国時代による情報の断絶から明治時代の開国を意味する。その後D、Aゾーンへ移行。

- ①情報の十字路口で右上（A）に行くほど人間同士の交流による地域の繁栄と成長が実現する。（イスタンブールの15世紀までの例）
- ②右中（B）は地理上の十字路口度は高いが歴史上の十字路口は戦争・破壊等で繁栄や安定の期間が極めて少ない
- ③右下（C）は過去に歴史的十字路口の高い役割で繁栄をしたが、外的要因により通商・交易の重要地点から離れて行った。

②インターネット時代の情報の十字路口について

インターネット時代には時間・空間の差別がなくなり、グローバルで24時間同時進行の時代となる。その結果、従来は横軸の地理的空間軸と縦軸の歴史的・時間軸の相対的位置関係によって、その地域の栄枯盛衰が決定付けられてきたのに対し、インターネット時代には「情報の十字路口」の影響はどのように変化するのだろうか？

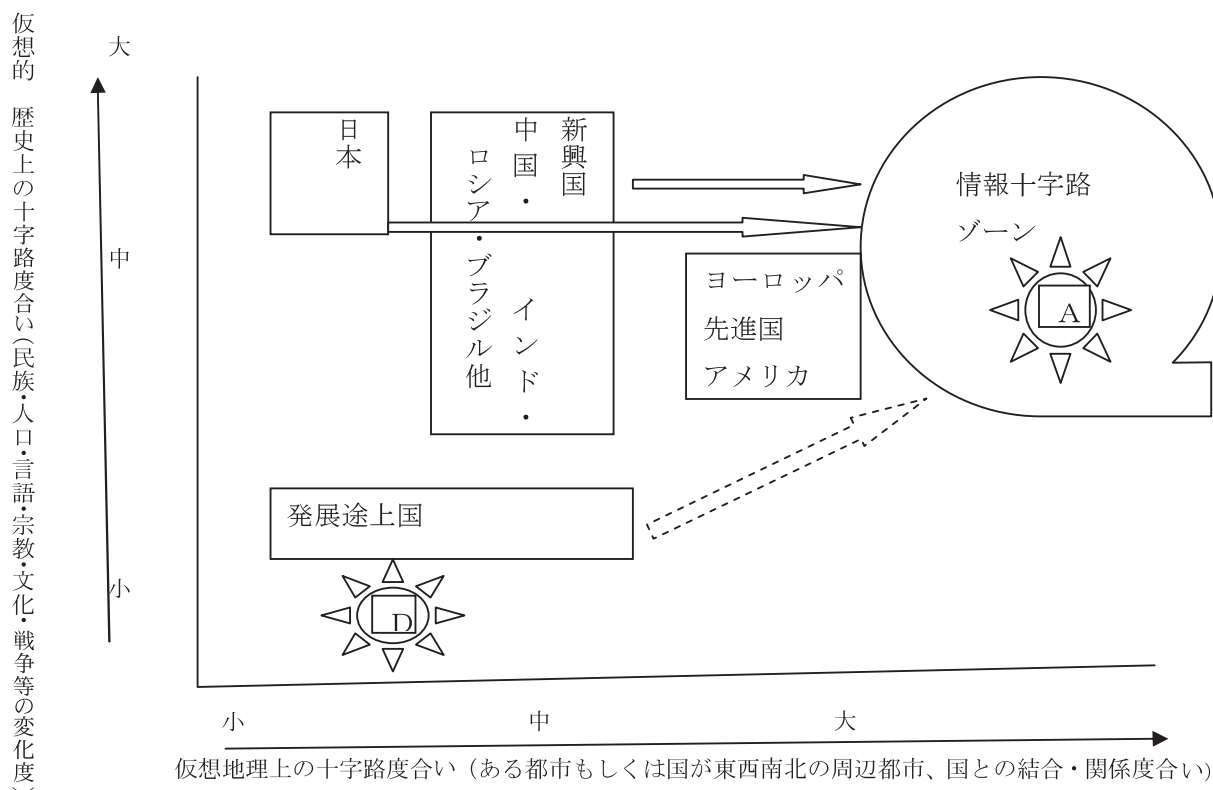
第6節⑥で見てきたようにA, B, C, Dゾーンによって一義的に繁栄と成長が決められてきたのに対し、インターネット時代にはあらゆる国・地域がAゾーンの繁栄と成長のゾーンに参入できるチャンスがある。

一方これまではAゾーンに属していたと思われる国や地域がDゾーンに停滞を余儀なくされる可能性もある。そのようなドラスチックな変化を起こす誘因は何であろうか？

ベルリンの壁の崩壊の要因は衛星放送による情報提供といわれている。北アフリカを中心とした地殻変動は携帯電話の普及と言われている。そのうちに、先進国・新興国・発展途上国などの区別も境界線が不透明になる可能性もある。

さらに言えば、個人レベルでもAゾーンからDゾーンまでのなかでどのようなアイデンティティを果たしているのか等考えさせられる次第である。

最後になりましたが、このような機会をいただき深く感謝申し上げます。



仮想情報十字路口関連図